心學道孔話

二

和書門
類 二七五二二 號
函 八九 架
冊 八 七

内閣文庫
和書
類 二七五二二 號
冊 八
函 一九〇 一三 架

内閣文庫
番號 和 27522
冊數 8 (2)
函號 190 276

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり
原本の文字など不明瞭な箇所があり

国立公文書館
National Archives of Japan

心學道之話 二編 巻之上

明治十三年購求

藝湯 奥田壽太講話
東武 平野橋彦聞書

前席

孔子曰坤道其順乎承天而時行積善之家必有餘慶積不善之家必有餘殃臣弑其君子弑其父非一朝一夕之故其所由來者漸矣由辨之不早辨也易曰履霜堅冰至蓋言順也

此段は維厥の高存知の易の文言傳より出てなり

大賢孔子の語で則易の坤の卦のことを説かられる

がてハ法ものべいまと今日の生活の頭はいくしやんづ
此坤道ハ地のみちとゆふ。えゝ来天地ハ世界の大父母ゆへ
天のみちと乾道といひ地のみちと坤道といつてこれが法の
大原でおざうまんざるゆへ大学の序ものいふ〳〵の
聖人がくさう天王様で極とたてたもうてござう
て神道でハ倉人親王の神代の巻も儒道でハ禹湯文武
の法をとゝのへ皆この天地の理域観くこれと親矩ゝおさ
るようがよ仕ゆういなん此語もてくどを通りで地のみち
と規矩すゝて世界中の人のおくるものやたるものや女
房たるものや弟たるものゝ主親やを人や夫やなどつの

ふる心得うるとは法をゝ〳〵かされて。まづくふ坤乃其以乎
とゆふせらまてこ学をたゆうわるゆうふゝと地のみち
いふものハ扨もく淳朴なものじやと侍感んかされさ
はこそばそうやなせるれば此大地ハ幸中天の指図と
承くちつくもはそもさかさかさるねゆへ天とふのハい
据な虚空ゆふもなゆゆうかものなれど此空が即ち法
ておざるゆへこそうゆ此大地一時とふ淳さしづかさるゆまづ
表ハ表の空がそろく暖よなりくさゆく表が来ざ
義ゆまよ芽とゆへころじやそよて法指図かさるとゆ大地が
小言ものいまびやくくと聖心の基本よりゆ芽と出し萌

の蕨のこ笹の蕨芽のこぶめつくもむしやうこぶめでさがるな
今の欲ゝ

東都花とんしもめづらしの寒城はてみどりふう〳〵る庭の芝草
これらうを暖こ寒ぐだんく強うなるふまさがふて梅の
赤ゝ桃の花でざくせうり梅の本に梅のむとさうせる又
天乃さぬぐ暑うなんぐそうやりふ夏ぬど仕出し時分
ぞよといこしやると大地ぐきいくと落じやの筆じや
の茄子じやの西瓜じやの南瓜じやのとさもくぐの清料
理で仕あれ秋ハ天のさしづどうけて松茸じやの茸じや
の冬ハ天のさしづどうけて蕪じやの大根じやのとえ日うら

大晦日まで天の法さしづのまゝちつともたそむきおさう
ぬ方人其順ゐるうちと法嘆じおされさ是を形容のうへで
いつと天ハ上ゝ立てたつとふ夫の中うるこの地ハ下ゝ立て
いやしい女房の中うもうこのよやそこで夫大地の清肉級
ぐ天の夫のさしづをれてちつともそむうぐ夫時この抱と
世界一道化出しておざると承天而時ゝ行ふと給られさ。
夫の清夫婦ハむうこう世中ゝ私会してついゝ夫婦げ
人ゝとおされさもこもなく左の在ぬのといふさうもこん。
なんとたつといこのじやないこ。それゝその雛形の人ゝハ
おもく夫婦げんゝしてさうのいぬのといふことゞある。

[illegible]

去とゆふまよふ嵯ハ吾ぬとゆふ夫と情ものけんかをこまるや
弘ざさきの畜生道ハ吾ん。この世ちらのちくしやうたるん
とゞまつゝいふもどやないろ扨その夫婦ハ天地のむるゞさ
おるるふおの人間の川流でも考へて情ろうゞ俯向ま
な向く流まるハ男。仰向まるハ女じやといひ
ますゞ天ハ上ろと愛ひ地ハ下ろ載ゞ自然れた理ちろ
おりや夫婦のゆたろうゞやるハ親く分ま引合して考て
見てやなしぬゞ親ハ天で上ま立て考いものふハ地で
下につくいやしいものを人ハ天で上ま立てたつといもの

[illegible]

でしたつくいやしいものえハ天で上ま立てたつ
といものゑハ地でしたつくいやしいものハ天で上ま立て。
たつといものハ地でしたつくいやしいものハ天で上ま立て。
い方ハ天で低のむくい方ハ地じやそこで親ハ天でうへ
指図まるとゆハ地でしたうゞ和てたいくとそむう孫ハよ
けまゞ孫くゞもハおりくくこの天地でつくろうゞ親父孫
がゆまま長松よ何くもハいゞしてハおろれまいろ孫するゞよろ
ろふとハいしやるゞと長松ゞたちをいくといへばよいま何老人の
いこぬ世話うち捨ておろしやれと法ハ親ゞうゞくを夫
婦の中もそのとゞりゞや女房ハ夫のハふとゞうゞをいく

順(じゅん)ばいいがごとくむつくりうつくしたりうり果は法華(ほけきょう)のごとくまつ(ぐ)あがつて小使(こづかい)する者うかがおるる旅僧(りょそう)がうりのごとくしかさうしかさういふものゝ人の上を立(たて)親の主人の妻の兄のごとくいふ中うかた天の位のものもんぢがたるとやうづゝ八文の素麺(そうめん)ぐ一ッ正(まさ)ごとくいつてハ石垣のくづまるゆうかを変として家内と比(くらべ)まハしくらと飯時ぐ一時おくまさといふてハ机(つくえ)筆(ふで)小でも筆(ふで)さゆうふ顔とまうあて嘆(なげ)と遠まるとてうど六月ごろよ雪ぐふ月うう梅雨ごろよ日照のぼぐくゆうかうものゆ(ゆ)ハ出来ぬうつずいぶん業(ごう)張よ不順(ふじゅん)のなゆ中うハ情(なさけ)まゆハなりませぬまこゝ

又女中ぐくいおの縫物(ぬいもの)かなるよハどうなる計(ばかり)よ糸とはまあて針ハ先(さき)ゆき糸ハ後(あと)ゆきせふうのさうこすれハ何でも縫る計ハ剛(ごう)したる法(ほう)華(げ)さる糸ハ栗ふ清(きよ)閑(かん)後さるゆじゃ。そこで主(しゅ)人(じん)の清(きよ)亭(てい)まぐされ(ば)こく嘆よ(なげ)くとゆつてゆくく。糸の清閑後ハいつくうおいゝくくと涼(すず)亜よ附(つく)でこゝゆけぐそれでよのゝのじゃそれとまるくすると世界(せかい)もうくく節ぐお者(しゃ)でいつもくうるる嘆よどふ清(きよ)亜(あ)でもくくまくく掃(はく)ごじゃちよ月と忍(しのぶ)藤(ふじ)ふ別まといふくく。何(なに)その中うふ猫(ねこ)猫(ねこ)でゆくくよハ及(およ)ばれとうるるぞこで考主ぐいや近所の法さ会(あう)ぞ。さうしたものでハるいといと。

それでも此方の產した時ハ中りく七歩ゞすぎて見舞
ハ人〳〵と引なるそれハそれでも中おもく成ゞよんと
いふと仍みなくの身分じゃそのやうなとさげてあや
まるハなんと引なるもとさげるじゃなんけまどそこゞ
和といふものじゃといふとへハ市ゞそのやうに結構仁
しやうく年中人ゝ河原ゝせられ独やうに見ゝハされ
る。ちと嗜まゝやきと引なる也ハよハ針と糸との縁の
それハこゝまでハ切ハ切ハなゝぬ女ちつ
ちんで牛の歯ゞ下るとうしてふもだうまんゞ悪体女の
ちつハいハ時ゝ月歩のやうにものじゃなぜうれハ月ハか

んゞ成ても牛体ゞ強也人ハ濁ゝるくゝハ悪ゞ成る又男のか
ろうハ墨つゝ豆のやうもものじゃ豆ハるんゞくゝりハく
居ても牛体ゞ陽也すゝくまで時ゞゆゝくゝ丈
じゃとハくゝ女といふのハちんぼ爰ゞでも事を乃後
よハいてゆゝくハなゝれ糸ゞのやうに強てたゝうて
も対ゝ虎ハ法事て糸ゞゝハ弱ゝくハふて居
ていゝ袋一つもぬゝるものじゃなハ牝鶏毎晨牝鶏之
只是家之索也といふて鶏でさへ牝鶏の鳴ハ吉の北
じゃといふてあるゝもつじゃ天地の上下といつゝうゝた
ゞじゃゝ猫の裏ハなゝ孫ゞるゝね女中方ハどふぞ

此糸を針やうの物の先者ねやうに情こまかさるゝ形
じやもしくは又はやうかれおうく女中のまばりつけて居
るとは男子の方ハいけよいといふてくるしたの嘆も
なして居るそこゝふ所方うはるゝも知をねゝ針の沛亭
主ハ家内とみちびく先達ゆへ又たゝまじや世話ゝ相森
志さう大酒呑ゝう色ゝうひたゝう強事いつうして三
間飛しゝぬよてゆくと糸の嘆もやはり紛森しゝう実
咎志さう游等かゝんさう拵ふゝまと結ゝまして糸の
沛亭主ハずいぶんわゝ糸の紛いと結ゝまやうゝて小針
ふぬふてゆるゝばなゝねさゝうすると針と糸とゝ一作ゝ

どのやうゝふたゝふ糸作でもゝゝ見ゝゆゝすゝふゝ
て拘事ハ行でもそのとゝうゝ生ゝたつゝものハ天の位後ゝ
はくゝりのハ地の位じやはのの煙筒の刺竿とすげるふでも
煙筒ハ先ゝうはるゝもの也ゝ天の位でこれと結ゝくるゝハ出
来ねゝ刺竿ハ後ゝうゝもゝげる地乃位のゝもの也ゝ物篇でも
結ゝくるゝそこで結者ふゝゝゝゝるの穴の太ゝと見合でそ
まゝ合ゝて刺竿と切ゝうけまゝうゝしてすげる又雑で
も人ゝいゝ字とかくゝハ左の方ゝかく長い分の点ハ海志と
いゝてゝゝゝゝゝく是ゝ見天の位でゝいゝばゝ主人や親や夫
やほのやうゝのゝもゝ又右の方ゝかく短い分の点ハ陰志

といふて後うしろかくせハ別世の絵で人でいハ家来やふ
や女房や弟のやうもものじゃ。そこで先長い事の陽気ハ
さて一うく天の位のものゆへ紙の中へでもどこへでも出さ
い而へ揚まいてゝまるゞみじゝうのいろの張気ハいとうかく
世の位のものゆへ揚まいかまね陽気の物のあさ
り一斗ついてかゝやなゝねそれと陽気の天窓の上へ行
ゞつてかいろう又遠方へとびのいてかいろうするとゞふーでも
人くいるまよハなゝね又おろゝ乃理のゆじゃけまど何国
の山の奥へ住ても二才ゝ三才の小児の時ゝ就ゞもも
てゞすもゝかしハむゝ山へ芝ゝうゝ焼ハ川へでん
だくまの出じゃゞ。ゆまとゞありうゝくゝの結でたゞりまゝ行の
もゝかしハむゝ延喜のみゝと様ゞ陽幼の時ときゝ教ゞ
きとゆそゞる陽癖ゞおゞつてその時天後宮ハ菩薩の尼
芸人とゆて。まゞ六位の陽公家様でゆきゞつさげるゞみ
くゞの陽傅母役の中うゝ事を陽はきゝあゝさうて陽さう
れゆへ毎歌くゝ陽側でゆとゞさゞ陽ぶいろくゝゆゝそは
ともおさゝくゝとろゞ陽幼の陽ゝ天の表のまゝお
でゆつゞうゝゆゝ陽ゝ中上らまゝ。そのゝ流小も
いふゝ三才男のあゝ六十中でとうるゝてもひくゝう
てもちゝさゝとゝさゝはゝんゞゝ生涯腹の中のあるゞと

なるとの母へ大切なるとおぼしめしてはむつかしくの
咲とゆゑ仏りおさえれ毎晩くゝ法そばでいおさまりを
おさまるとゆゑじやゞ。そのゆうを紙のうるめへでうれ
所へ注て見ても小兒の時のをむしとゆへば出よやそい
ゆとつてさるのそといふて抓るの母の用けさばとうり
俳諧俳諧冊の母者の法夫婦が清出すちおさえて
園門を乱といふて男神をおとをの方とはをる女神を
おんなの方とはをるそ此日を國中へ人の方と清志めし
おさえてゝ用けさるのめへ。その事を厨と嫌とゝ撥て
清俗おさまるとゝのじやげる。そこで凡がおがれて来さ

とゝふおのまくゞ乃でさるとゝ出よあてさへ居まハ
食ふいるとのおしへ孔子さるも難と生ふして獲ことと
浸ふとおもせらまてゝさふ見るとゆでも法ひよ。法と
ゆるゆと出ふさやちらねゆで清ざうまん扱を厨ハ
湯でさいとゝへのほゝを伝のたつといとのめへ山へ芝
りよのゆり嫌ア法でゝくいおへるゝを伝のいゆよとの
母へ川へ法清ふ上るのじやさゝへあけば乾坤のうゝらゞ
ゝじよの母へ家内ふとのいるの出来ぬけまゝゞくく厨ゞ
所へでんくゝ下ゝうゝ嫌ア山へ芝ゝうゝ上るうゝ夫婦
げんくゝやゝ光いさうの嫁姑のゝゝやいも出来る怖いお

じゃ。さてふかくにたぐひなき天地と違さなきゆゑ
ゆう。ずいぶん結構なこゝろねをもつてだぐりまんぞくして
たゝしやの孝子やのと。いふるものもいかんてかつらしい
ものするのでいたるものよりやはるものい親のんのまゝよ
たつて河性く莞爾く順〻ところで孝といふ名が
附家来い主人ゴ身と。まうせ。さつてなまそたるものはいく
莞爾く順ふところでたといふ名ゞつくのじゃ。さて女
房ゞ夫たるものでなりきんぐ。ちいくおこく順ふ丈夫
といふ名とはもう弟ゞ兄のんのまゝなつてちいくおと
くたくゞふ順といふ名とはなるものじゃなんでも

かうこゝ。ゆけば世と世間と結構なたのもいこと
世と若しかいが達ともいくふ楽びともいつて後の福の報
といふものしやくかのいはゆる。
ちいくの道理でちのはたらもあるものも九ちるる
何ぞ後とのはたらきとこゝろもふるものも湧てふ
ものもいかうまるものもいかうまるものもいかう
おもふ家ちがひよや福といふ家い達ものも滅たり
ないくでおのくやはたらきはものゞくや私おがらまれつく
ゞくのの名ゞよやそれしやくうものゞ兄一このゞよやくうぐう
業ゞ結もし五倫のはたらきと全くちこなるそれゞ後の

はく猫の神とゆふのハその裏の猫といふものもおなじ
神なりとゆふ。されども表からのみやなら。そりや猫とのの神
心人ばかりのものなら。のちのちぽんぽんいくハ天地の生れひの
ちうとしてれたしくらい不孝しらず夫婦げんかやらん
神あるそれ家業ハ猫ハ猫でかとたらるそれゆへ
の猫といふものでかいさうく多くの神ドやなるゆへ裏
夫婦ようかるものの足結ハ生よりそくものとけりやこりやこ
仕て居らうどふで猫ハ○べなるねもづどや夫よ
ハいてあるいおかしハ猫ハ武士のぜんぜんかけ人げ友達
のこと思へばとゆハとハ十月ハ神無月といふハとゆふと

けでいふでいろふとゆひまたたまハ三助ものしを紙でそりや
十月ハそろくの神さまゆゑ。ちゆふ出雲のゆ一日出ゆやうち
諸國の神さまゆゑ。ちゆふ留主じゆやそこて神なし月といふ
ゆの志の字と書して神ゆ月といふ
たまゆかの男も尤とかんしんして内へかゝりそのとうと
女房ハ。ちゆふして安せまんと。女房ハ一ちゆふ合点せびこゝ行ゆや
きやと考へてそりや出雲の行ハ行へ行しゆゆと同ゆ男へかの
男もサアそれハたくさん社へでハ行ハ行ハ行て
ゆうしやゆる。そりやハとしふ。おまハ知ねゆて又出雲でハ
神ゆ月といふゆやそれもおれハ知ねしゆゆ男へ女房ハ

いよく合点でしたぞやの。さんゝねるじゃ十月でもゆ
しやるの神さまは歳をもゆるやうあの加護さるゐと
どんやあを十月でも。ゆるしやるぬと云て十月ゑびす
講といふなるが。ゆるゑ紙屋の兼れで紙の小口と裁のこ
たとゑびす紙といひゃんが。ゆるやうの神の立のこりと
いふるゑやけるさう云れば加護さるゐはゆるゑ遠いない
がそれこまる現在ゆるしやるぬ美之神と云て此方の
内に十月でも出ようぞんがうちといふ事をもるる証と
書がはいて紙の神さまは。ゆるゑ遠いぞよ。えんぼう神は十
月一月でもよい仕てたさればよいゑとゆるゑ出る工面いた

すいかとゆふゆゑ如房も考へてそうやれがある所屋しさ
で実さるゆがある神さまと得んさんゆい欲とよむがよいとゆう。
おまへもゆふそして何とゆうやしやれどゆひまたなこは事之
もそれいとゆうひかゝる考へ出した欲ゑ
いつそうの所る世なうそう神之月びんぼう神は家ともをれす
と涙まったまびゆうの徳といふをのいさめうもをのじや
面こかいるやうか美之神ゆそ伝へむよろつとあておざつ
さそのはすうさい痩こけて色青ざめるゑはゆぶまてゆふ
国廻とゆつてさもかるゆしげゑ立ておざるゆやぶまさまぶ
うちこおておざるゆおまゆ氏ゑゑなりたいをのは此通の

の肉梅になれといふてあるのしやの肉梅しい家内の事で
家内中う年中おうみ新で親も。おぶくるも。おぶく
旦那も。おぶくく家来も。おぶくく走も。おぶくく女房も
おぶくくでばいと笑ふさるのないの肉ぐ。やぶまてこ肉梅と
いふこのめ、貧乏神ぐ日歩ま新向してまわつてやるこの
法おめーしや法信作の方ばい法ぐこの法ぐうちうる法
なうおさるぐよい又その妻の福の神ハ笑ふるまうすること
見へて家内中ぐ年中ふこしおますると笑ふ家ハ福
来るといふてつい福の神ぐおぐる私ハ法て法すめハ中ま
せねぐ。おまへさん方の法ぐおもう方とどちらになうこし様出し

て法まつりおさるぐよん叔それうぐかの夫婦いさそち
欲の徳よりも貧乏神ぐ出てやくそとよろこんで
見て居まバ新へハ出ばして上の間へちやんと居つるめ夫
婦ハいつられて。そう貧さんいつちうさも出雲へ法おのでハ法
ざりませねうと同ひまーたまバいやくとうくもやく
のしやない今のうちの返奇と仕ふおうのしやといふ
やうめへいやも法返奇ぐも法ぐおもぐ及びやませねぐ今月ハ神
無月とやて。そうろくの神さまぐ。出雲へ法出ぐや
げるそれまはうさハ法めこ居つてけ。おさんまんといひ
まいさんバさまぐその神といふんまて返奇

紀藤して家業ざくひの淫り好んで遊宴富にする
と涙まてしげふそこで喜ぶ猿とたてをてる美之神
めと例まあうひふ者ろ第とろておてかきべ美州
ちまふと飛のきをもくふ園十郎のふるまひを
ありくいんせるをへおりやをーどちくもわたくちんこ
さも為つのさ清あいさいのとふまるさものどやないろそ
こで女房ハそれと見うておまをさけ方の人美之神でも
神さをの清仲るを礼してい野ぶるわくら出て
おこをうと美之神のまへはをこちけ人の猿
まうら吳今いたふ清を礼さをたくだちでおぶり

ませふまう又はちをさをの清遍面もはうろ。もうふ
ぶりまをすをへはいあの中をうも清を礼も。おこりまん
うう。ちと又邪を清出ちをれでたーさりませといへま
をれバいやくはの中をお猿寄やかんーをくとをこをらぶて
おてゆくのハそりや福の神のまどやおれいまをあのやう
お。おへうりが大好をへ変のやだとあるをいやとやく
といををるうを女房をちをりてあやしくへ
おりくハ猿ふへもゆきをれ美州神一生ををふと約束いせね
と涙まをれバ美之神の返事ハ
をを厭ざいやどやといを人すをおおをくをもを二世も三世も

といふことげに成とおのゝろい吐とやら左傳にも禍福無門
唯人所招也とおつて禍も福も實に外なからうら来る
そのでいないゝろ〻の行ひの善惡邪正が潔ふつゆ
ほのつてはおよい貧富盛衰禍福吉凶と。さまゝのす
うすとあゝらべてうと奢の繭といふものハ神ふて眼ふも
かゝらぬ位のものしやゝ。それとはつもれば糸といふものゝ
なうそのの糸と漸〻〻積でもくと後ハちゝめんどやの
ほ二ものしやの織子どやのといふ結構なすが
れと。あゝらべやうもものどや本絹と。おきべもめんとなり
麻とあれば布となり蔗とあれば蔗糖が出来ることを
おもへば遂げ出来ることでも織積ものの善悪ふよりて代
れの二トゲとなるそれ由へ善と孔子さまゝ善と積の家
よいかるゝべ竹の美びゆう不善と積の家よいるゝ
竹の狭ひゆうとおふせられ

中の巻へつゞく

心學道之話二編巻之上終

前席之續

民家の友はかせのほどくのつゞくあらんまでは人あるべの田
畑も横ざれば名代成よ亜べ悪も横されば才代とすふ
亜べとやうにつゞくのでもこの横るといふものを拙悪しい
ものでおぞりまべけれ三十三間堂の柿本とゐるのさうな
石松は帆柱のなるやうな大木でも。むしめるこのやうな
大きなものでいなんもとゝ風揚枝ほどもおさん芽生ぐ
あつさけもど天の生れ者がまぐんくゝはのりくゝ。
あのやうに大木になるのよやう。そのの伸るのと直枝と
たうゝんはめて居ても今あれほどたきうるあさといふ

るが眼こそ見えいせねけまど時々刻々のびるふちがひなけ
まこばこそ。あの世うが大本よなりまん人の苦と樂といふ
が。てうどあのとうちをものじや先んい湯で即天かゝだい
湯で即地そこで仏事と為まんひふもよが天心ゆさ一つの
通りようと知ゝこう疾よ知ひこるふと知ゝこう疾よあゝこう
兎角このかゝだの地がむ心ゆ天の命令よ去ふて生ゝ
の乳城毀ゆねやう勿わおこたりべそれが則苦と樂といふ
ものでこの福の芽をゝしや又その裏ゆ不苦と樂といふ系
天心よいよのいるとと知りおがこう地のかゝだの掃ようがるけまべ
勿わ知りべんよいるい事と知りおがこうぷかつてがよけまべそ
まこいやめずしてし法の事いまさよいさよいゝ
ゝ勿ゝふ生ゝれ家城そこなひ世ぶる。それが外不苦と
樂といふもので福の芽をゝじや恵じてよいるするのい苦ゆ
野の美ゆ世ゝおこるものでたきうなるのが眼こるこいせねれ
どたきうなるふちがひいなん又ゝるんするのい髪そう紙
石見る世ゝふこるもので世ゝふたびゝ側よつゝて見て居ても。お
まほど耗ゝこいるが眼よるこいせねけまど耗てゆ。こゝら
がひいなん更なまばこそ後よいい長方形の石よなりゝ人も
おゝこせねゆうよなり。いつの居ふゆ世ゝ亡失て仕まふ。そこで
おゝこの居城樂ゆ餘殃あゝと作せゝれ。

かどうしたのハ法せいなゝひぞくんをゆゝしたてい若しゝ
右の足と左れ足城かたうゝ毒をよむゝ〳〵ふゝ出せばあい
九州長崎でもひぐゝしハ奥州松しまでも切くんを切まると。
かたう毒をよむゝふむゆゝ泥田の中ゝふんごん
ぐう藻川ハ落くうして大騒我せうやなゝね差いは方ハ
ごうりをけ今日のはをゐ城かくゝしぐふぞ却退城せねやう
清用ふさるゞよい悪じてゝ人れ角のくゝ罪も科くも
ゝぎりひくもぷぐき事れを上ゞ自おゝゝ親こゝゝ吏
まゝゝごを城三刑といくゝぷうゝハ自ゝゝしい行の紙で
首城ゞられ親こゝしハ藻ゝかゝを吏ゝゝしい牛製くゝゝ

刑四対ゞあつたげゞ吏城おゝゝれ女と二間本の上一たの字
形よゝをは事足ゞ牛と二疑なゝゞてその牛の角一女
の足と行足ゞくゝつくおいてゞすハといふ時長吏ゞ口ゝ城
嘘で牛れ面ゝぷりくゝふゝきくゝけるゝを牛ゞのゝりくゝ
左右ゝ引ゝきるゞふするゝそのの女れかゝだゞ騰らくゝまき
つよゞけるといふゞじやなんとまあおそゝしいゝゞじや
ないゝまゝしまあ今どきそでハ市上のは慈悲ゞ拾ふ
ゝハ面ゝそれほどの事ハほぐりませねゞそれでもけこゝの
罪ハちゝとゝゝすまゝゞゝのゝゝでもゝる藻ゝかゝを
ゝゝ元来大坂でハ今でもをゝゝれゝハ捨てあるゝふ

大きな涙が出してゆるしてくれるようなやげしやうかを忘れぬ。
そのかを見ると平生親孝行不孝をしたこと
人を不清新しらするかーけ不孝が淋くなりて。
かゝれとうようなんて来るのじや右可
はもれまもじめの涙ふりきて出るうようなりるかを
えじめは不返事や不清新けるかゝ世間眼ゆも立
孫が我もるいるのも思はぬ中おかゝのじやげそれが淋く
なりくして親ところよりこのといふやうな恐しい
このようなると世間うもおもいくといい舶し我もまさ
情なかゝと氣がつく。その時よりほど悔んでもふとう

かゝしい出来ませぬうもじめは小さい兵返事や不清
新けあいぶふるうなりして。志まいるやるいね却事い何でも
そのようなる小夏が狭て大事ゴだるこの母。そこで家ゴ
清真君ど鞍ーゴ真又城鞍す一朝一夕之故ゴ非を由て来る
ところは者漸美とおふせられさふ月ると若といふと愛こと
いふとは一つこの不善といふと狭といふも一つこので早之
かとおとで名はかるるだろうじやおふもいふ右の足
左の足はかるう毒よ小句ふくふくふむとこころで若といふ
名がつこ先方ゆきつこ不善で愛の後のといふ名がつけ
又その足は後くくとふむ西で不善といふ名がつこ泥

田へふんどぐら濱川へ落こうしこと迄で殃といふ名がつく
やうなものじや若い品やふ供品はまけることよふ合点
せうやなるね。まづ親はや淸主人の仰るゝやうな行事
でも只あいくゞたるもじや好でも親はゞサアおきい。おこ
ふせられゝアイといふこゝをやうふ起さ使よりけと
おこせられゝアイといふくはうひよゆさよなるひせよと
おこせゝとゝアイといふてくよなるひ淸書せよとあふせ
らるゝアイといふこゝ讀書するこゝ十ばび丈が長と
候といふものでは孝行じやそれと行ぞ是が宝まいるね
ゆうあるとつひ安西るゝうゝしゝうゝ頼ふくゝしゝうゝ行うう

晩まで沒つくぶつくそれが別不出来候といふこのでも
やはり親ところへ芽をへじやそれとゝくいふてくる
と親はゞこれ長松と呼おさる時長松が出ぬ。そして。
へ。又呼る。仍ぞ。はゝ小ぶども性じやないう長ゝしと思ひ
居るところ又長松と呼よびおさるとやはり黙て他の
用仕おると今度い親はもたきかあゝしてコレサ長松と
いはるゝその時ゝ長松大きかぶり表へ出て正ゝ行じや
いかといふそこで又親はもその返事の仕やうはどふう
と咎めらるゝ。さふすると長松がをゝといふてこうゞ。ゝうと。
つひは芸一するやうゝなる。それでい親はも捨ておれぬ

ら親にもいろいろにごろ〳〵と又いろ〳〵と長松げ。ろくやうまし
よい老人はがりくとはくをおのるすぐれで藻の三助とゆんや
しやまき犯に見まであるすじやなんらと悪いものと組親
ふしておきいまざよいくとおりふて張るこれがたちうち
天地の上下をもつてうりうした給もない不孝このおつはけ
二間本一ばげらるく警古して張るのじやげそれとあそこ
いるもいもの子を拭雑ふるまるく耕へざるゆ一今日も親
ふ云繁ゲ〳〵明日も犯に大とばげ〳〵これげ不器とつむと
いふりて後よい親へ齢断するゆうになるもそ〳〵げ
日〳〵ふをのりくゆくとつひよい掘巻とふりばげるゆくふ

なりを掘巻げたんくはかりりく上をふなるとはひ親と
拭くゆうふなる親拭はいてもちづりうない書になると
後よい見で跳らるゆうふなる親と見跳にするゆうばと
もない氣になりく来るとはいおそろしい親ころしばと
その由て来る不孝者漸矣でいおぐうませぬうまいはふ
るも走にはうるも反理いふ同じるゆじやはくをわりふ
返るゆはまぐよいはくをねの組乱はまぐよい此くをねは喰ハ
まぐよい此くをねの猫はまぐよいと思ふうちふつい二る本一
あぐうく死人のゆんせるものになるその時に行と思ふきて
屁ひつく後の屁すぐわ行ばふ巻ふもたくねるゆ一おくん

学よりあしくよりくるに来る我のむと無へたぐ。一すぐかゝ
孝はたるよすまよばなるねるでにぐりまん又子供元
ごい親ぢが行ほどぢにりかさらふとかるべ教とふく
らんまいぞ。なぜるれば親のこゝろといふこゝろのいと一すふ
ものとおもしくと思ふだりうめへうぐ食ゝのも食
ずふおめてみよい答せ。ゆうぐ考るゆも思べしてふ差
せく恢ぶハ世界中は親のこゝろじや奥と歌くも我子は
なの出せと称ぐふも。ゆぐふはたぐいいまもはいたび
居くまゝもはせば。そたぐふは業と称ぐふだりうじや
業とんよりて業ぐとと親やせてゆぐかうは甚うかう

答てゆくうり賺して月くうり悪い事はあるゝふわゝはあう
ゆふるもどふそ悪業るゝねゆう若人うて生るゝら
拘一ぱいでのゆじやなぐふはゝるたびくゝあゝゆぐん
事じやと実よ城合っておゆゆなゝねほどのゝのじや
況て今日平常は事ゆどふハ行ゝくゝあいくゝと勧めぬゆゝバ
なるゝねゆで清ぐりまんゝ小備後の国三次郡日下村と
中形ハ私ゆ主形廣しゆ城下ゝゝ十六七里小の奥主
でゝぐゝゝ山ふゝういゆで清ぐりまんゆぐゝ和の百姓ゝ。む
らし的暦の頃。清ゝゝとゆて。ゆづゝゝ孝ゆ清ぐり
ゝゝゝ清ゝゝハ小ゝい百姓なれど弟の的の回ゆぐ

先祖は迫田英流さとりゃて三好式部を主とも慕くて
御くさぶじゃとゃまたが時代よつまく右のとつり農家よ
くぐうまして代々山日下村で居まんところ。かの清
右衛門と申すものが孝行にて母親よ。たのぼらよく
つつくさとゃるゆでごぐうまんまつこれい余ほど年月の
経ちうさるゆ。その行状が。くくらくいぶうませぬが家よ
一ツ感心おおこるひが。ぼうまん。そんとほくふーゃ
ゃせふ。その日下村の近々よ三筋町と申てそのころ。の
ほ支村の風儀悪おさんさ和が悪ぐうまんが手和
の者へ清右衛門と父親が性よりまんよ打ふー雨あが
つで路がたくさん泥濘てありまんゆ。清右衛門と。え
いでおてゆうふとすると母親が月そ。ぐづでいるい足弱を
いてゆけとゃたまいぺんといふ。ぐたつさ今もいさ。ぐづと
ぐさくぬいぐ足弱よを抱くんだいさ。ぐうゆうゆ。ぼてさんド
ませふと行きたふ出くゆうふとする。又父親が月くく
路がるゆよ足弱でい茅蜩るるく茅蜩をいてゆけとゃひ
まくされば又ぐとゃといふく。肝よ足弱抱ぬいぐ。ぐづよこれ
うへぺたいさ。ぐうゆうと又出てゆくと母親が又月て人ぬ家へ
ゆくぐぐづでい足が汚まる足弱ぶせよとゃひはこれば
又ぐいといふて足弱よを抱くゆうふとすると又父親が月くく

足袋でハ路のかるくさ困るであろうゝ茶の糟このせよ
といひまゝ[illegible]れば又ちいとゝいふく茶糟よ。もたらくる手通り
よ茶糟と足袋と仍箱も脱ぎゝ。ちゝうし仕あうまゝさ
ゞ後ハ所足へ足袋ばかりでとも紙所足へ足袋ばかりいく一里で
うゝもあゝ二次の町へゆきさまんと知さんゞ途中でゐて仍
ゐへ手毎うゝゐんゞゝいゐ紙して歩ゐうと問まゝゝまで
父親ハ路ゝゐんゝゝ。ゐけといゐゝ。ち釈ハ
ゝゝゞでハ足ゞよごまるゝゝ足袋ちけといちゝどちゝも
親の命令なればそむうきハ仕ませねゝゝ通ゝゝく
仕ませんといふさけゝゝ孝ゐもゐちゐでハ

おぢりませれゝ[illegible]ひでちゐ平考釈への仕へうさ
ゝ思ひ申ゝまく問ゝ出ゐればその所孫ゞこの
清右衛門ゞ孝ゐやぶゝく法感ゐゝ[illegible]ゐ常ゝも
伊ぶりまゝさゝゝゝゝゝ後ハ清右衛門ゝ持言れ内田池
一畝永代ちくゝ[illegible]ゐつけゝれまゝさそれいゝ暦三
年丁酉十月廿日のゝでちゐゝゝゝ後十二年
を經て寛文九年己酉の年ハ清右衛門ゝ衰弱のゝう
すと孫孫ゞ清ゝゝれて銀ゝ六百目下されさゝも
あゝ又そのゝゐも七兵衛とゝうの代ハ主家へ大造ゝ
借銭ゞゐ来まゝでゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

[illegible]所の二代目の殿様が秋清右衛門孝徳と思し
めしおされて在の借賊と称しびきもきゝ
ふされてゐあり
ふされざるもはぶりまんしゝわ千後ハ家も次第ハ栄
うまそう孫お孫に今に百姓でゝ居のともも
お徳くおりますげらそい芸備孝義傳ふも表く
出くおりますら出てもらくお孝てはゝらにせむ
歴しの家も対代よりまでハ絶しいらのふ成達ていハ居まん
けまこと清右衛門孝実の徳ハ[illegible]ゝ家ハ[illegible]も仕
ませうおいくよ孫ゞさうゝ今ハお孫してあると
くい実ハ世中ゝ月出ゝ見ハ変びもるいはぶりませね

物の盛衰ハ表れ世ゝ[illegible]ゝの世永い月日ハ[illegible]
上ゝ[illegible]ハ世ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
て仕ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
心孫の愛ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ
そむゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

後席

扨前席ハ申も恐く浮世話中ちゝ事でも小さい事ゝ大きゝ事ゝなり狂いのようゝ事ゝなる落いのようゝ事ゝなるかハ自然ハ理由（孔子換ゲこて小易の坤の卦の言ハ履霜堅氷至と申くあるそよと作ゝ事ゝそりやゝこゝいふなれバ霜といふものハ元来すゝ冷ハ和らのあるれど夫ゞ凝と雪しやゝ成れしやゝのとゝいふものハ霜ゞ人ハかよゝ道徳（積ゝと毎日ゝ〳〵ゝ踏かゝるとゝ後ハ堅い氷になるといふ事じやゝ人の心もそふゝりで生まゝ時ハ法たゞいゝ様といふものハ激度もすい悪いく濃厚ゝものでおつたけまゝ生長するゝ去ゝゝ成てゝるゝ法者ゝ生ゝ法者ゝ粥ゝ小悪知恵ゝ法者ゝ粥ゝ小悪知恵ゝつひでいけるゝ中ゝ成ゝとゝふゝものゝと出来しゝものゝじやゝ至極の欲ゝ

いやまゝふ新城新ぞゝ思ひそゝ激ハすゝぎわすれゝそゝ絶ゝ一度もゝ人ゝゝ事ゝ来ゝなくいゝゝ事ゝもゝなくゝゝ事ゝもゝなゝ思ひゝゝ事ゝもなゝ迷いゝゝても思ひもよらぬ事ゝゝ事ゝ

お互ハ胸の中のむしやくしやハ早竟法世の新法師でゝ新法師ハいつの間ゝ腹ハ中の主ゝなゝゝゝ成ハ不孝ゝゝゝ法主ハ不孝ゝゝ

むらの石川ゆたかなれども日本橋でも赤子のこゝろ
うゝのゆゝしき恐しいこゝろの上やなにはやうく蓋の始うづ
まおくれ日天窓てんくかいこうくの可愛ら
しい奥であつるこゝろのちがひなしいるこ
おそろしきこゝ氷の角も元はあ
更にやぶりのこゝ清五郎ふるゆゝ別ぬゆゝ法こゝんて
よい事と成なれ孫にたらいませぬ古法ふも一日若と
約へば福いもこゝ五郎といふこゝも狭おのづゝ主をざること
いつくこゝ五郎二日でも拠法や清五郎人へ蓋ふくこゝの唯く
の若代約へば俗今福の神ゝ蓋ふくこゝいても奥之作ゝ出て

ゆくこゝちがいなしこゝそのこゝらで一日恵と約へば狭ゝまゝど
五郎こゝいふこゝも福おのづゝ遠ざるといふて奥之作ゝ来
ぬふもこゝ福の神ゝおそれて近るかちがひなしこゝそれゝやふ
こゝく皆孫へ年人代知るゝと毎度清すゆゆのこゝや
園の秋こゝ外と歩ゆこゝ鉢焼持と先へたてゝあるこゝ行ふ
へ住ても先事ゝないゝ鉢焼拾ゝ人間も七間も後へ清まて
ゆゝこゝ妻性こゝ走りあるくこゝどの中こゝゆゝ五郎こゝ遠ひこゝどの
中こゝゆゝ大惟我仕中こゝも知こゝね先ゝこゝのこゝや主こゝつゝく
変こゝおこゝこゝろゝいこゝゆゝこゝゆゝこゝあるゝの程こゝ紙こゝゆゝ唐こ
の海こゝ居る程こゝの血我こゝて清こゝのこゝ出こゝの程こゝ紙こゝや

とういひまんがを猩々といふものゝ人に通りてこのもの
いひ取つくかこのもの山へ捕る事とぞ。山へうゝよう知て
海の底へふうゝ流るゝ中へおかねをのよやげる
されど又人間の知恵いかく底つで猩々ハ酒と玉つて好きの
山へ酒の匂ひと嗅するとぞいつも海ら。わうつくゝ来るとつふ
るとちやんと知て居まんうゝ酒瓶へ酒ハ入て栓打とそへ
て海ならの茶系へ栄枯なしへ至さてそれらを刀て
をへさ茶ハをへなりぶ立てむすび合して層の形とぞいく
つもはくゝ墨ゝ書人ハ書方にかくまて刀て石まんと
を酒の匂ひが海へ底へもとるゝ刀へて猩々ゝもう鼻と

をこゝくさせておりや三助猩々よハ匂ひがするよや
ないうごりやかの酒じやう行と海うゝあがろうぶじやなへう。
といふと三助猩々ゝ。やゝくやつさうや揚らまぬそうをと
巳ぶ達ゝ呑せゝ酔せゝおいておころそふといふ恐しい
計器じやといふと一疋ハ猩々ゝがさあうつても呑さへ
せるバよへ変ゝ居て海の青嗅ひ。ぶひと嗅ふうハぶひと
こへ性ゝく酒の匂ひ城かぐわうぶよへといふと皆ハ猩々ゝが
なるほどさふじや嗅ぐうゝよへたるのあるまいさあゝく
みんな来へといふゝそうゝ城をもれて酒瓶の
例へ来てゐるとぞそれハ又海の底うゝ嗅ぐやうもくのよや

ないもの、皆がこうやうの匂ひじゃ。どうもたまらぬと鼻と
むこうへさせて、瓶のまらうとうろうく仕おるが又一疋
の猩々がこうや奥だつうりじゃ。どうも堪らぬ。なんと
一盃づゝ呑ふじやいるまいうといふと又一疋の猩々がいやく
めつさふひおされぬぞ。あの今まで捕まえた猩々も皆その
挿扶桑おつ立てがぶりく呑ごめへ。ぼひ砕ておころされ
たのじやといふと皆がいろさまの挿扶でのんざらるろふ
けまどおしで指へ法者で嘗るくるぬ法がよろろふ。
皆さふ仕やうじやあるまいうと毎よる指のさきへつけて
おしづ嘗て見るとそれい又奥ざやうがうのじやないもの

はまるうぬまるう。むらやうりくおりるうち。又一疋の猩々
がぐるもおりるさだうとや今一息呑ぬやうぶ挿扶
とうりく呑といふても腹一ぱい呑えるぶ砕ぬをひい
あるまいうおしづ砕ぬ猩々呑ろうがよろうといふ
皆が又さふじやくくと猩々挿扶桑をおしづ
呑で居るうち。又一疋がいひますこい全体酒といふもの
腹一ぱい大酔して砕ぬ猩々ばかり沢なにいるの。もう今まで
はろうされて血球ばかりまる猩々も只酔さをつうりく
ころされさといふでもないソレを見下と見い美味生るり
層がいくつも。はくつとあるを層とまいくいざる蹟と

おどろく内へは、杵で殺さるゝのじや。臼磨にもなつかぬ
かも怖いものはないといふとかの狸も、すさまじやく
碓で磨をなされ、せうやうちころされる。さうぢやるは、そ
んなら碓だけ呑みくだくと、幾たびもぐいぐい呑みくだされ
碓ならおつかといふので、どうでもその磨がもたれてしまい
ぬげなぞこそで、又背がいたひますれば、何とちらし磨をもちふじや
あるまいか、腰でも濯さへおどし孫が杵ふ手づかひもある
まいかし、臼歌たゝら諷て居ようを、孫して磨をもいくし
拍子とりを諷ひましたら、どうでも又足拍子がとりよくて
なしねせうふうぢやけれど、そこで又一足が、ころもね中ゝに足

びやうし一ツ腰ではどうならぬといひますれど、皆一同にならぬほどよ
くろふ杵だね。中々に一ツやろふと足をあげるとおそろしと
杵でついたうろされて血をとつたといふやうなもんじや。恐ろし
こりや、きびしい唐のものにしても、むかしからあるものか。ないにある
そのうちは存じませねが、今は此日本にも大分その事が起る
がてん。まんも色も酒も欲も驕も皆おそろしいものといふ
ことは誰も一通り知ては居ますれど、実におそろしいとのみ
いふるは余所へが諺ぬからまあおはなしのるには、やう。
まアおはなしなれば、世間並じやと思ふ油断がはがりして。
つひには命とられまする。是ては此方はこれをうけて此有

んおさるがよい女郎の縁と卵の四角が。あれハ三十日ハ月
が出るとうゝいひまたが女郎ハ嘘をついて客をだまし女
郎の縁といふものハ〳〵かんがさいた客が来てもいやな
顔もせず可笑しもなくハよく笑ふ〳〵見せるう然しうもか
いよ泣くゝ見せるう脇もたゝぬ〻接たち新しく見せるう
嬉しくもないよ嬉しくゝて見せるうして持出して嘘と
本ふが女郎のたゞやがそのの嘘と実をけせぐ。どこ
の牛の骨も馬の骨とも知らぬものゝ内へ入てうろ
〳〵さるぐる正真の吉原といふものゝどや者ゝ者世の差
い流いをくゝねのやうゝ知て居ぬ。なゝ嘘ハ誠ゝ誠ハ
ないこゝろ嘘をかくしてまわ仏ハ仏の名ハ
あの女郎ようつとぬう風毛織ぬるも寒ふ
ふ房ふ男しやまねけしやとんのうハ笑ひおぐゝもまぐ
のだうハ嘘じやないおうやハ伝実じやといつのうかせう
つひ唐土とをいく居るが歳年もあるものじやんそうや皆
唐土の狸くの好まいづを血をとゝまるやなゝぬおそ
ろしハうじやそれよ性て変ゝ又おうゝの性がある

下の巻へつゞく

後席之續

昔吉原の扇屋に花扇といふ名高き女郎ありてそれこそ虎
毛とぬるまでさうのが義人といふ敷ろぐろいかつくつとやま
すが。そ須或ハ一代に漢の奇合がいつくいづくも須よ
辞宿もよりだもしとは仕ありまんうちに一人の男が云
まんにいや雑うがといふてもおきよいかおぬいおきいそ
吉原で当時の全盛あるぞやの花扇と二世に契として。
記拠ことわせ拠で切せる男だと自慢で志ましたこバ
又一人の男がいひんにそうやどつも合点がいりぬを
を扇はおきふこそんに成たて。命でも惜らといふ起拠

と出さく小指まで切て居てあるこの業様と指と切てやる
こゝづがないといひまゝられぬばかの男がたゞに腹をたてゝ
おきゞ喧嘩いふとゝろを小指ハおまゝが現在こゝと業ふく
おもく居るこゝを袋うらやくしく出してゝんせるとれて
見まゝ成ほど荒唐ゞ自業の起拵と平大根のやうな
指じやゆゝ一人の男もたゞに髪ゞたゞそんるうちおれと是さ
のいと情ずうおしてゝ見んまゝ同じ起拵と同じ指ゆへ
たゞひと調まゝて居る而情と見て居る一人の老人がそうや
おうふいやしやおれも変と業ふて居るゞし殊数袋うう
出しうけるこおちゝ計隅と居る人はそうやうちゝも業ゞ

あると紙入うう出しうける人おちゝ計隅と居る人もそれでい
おまゝゞのも結しいと。おしうもやんだう同じうのこゝで入
人ゞ膝とつゞいて。こうやゞうしまつじや起拵と出さうも
同じゞ。きう人紙ほど金盗ゞ業意でも。小指ゞ入年の
うふまゞづがないさてい熟く化されまのうと五と腹と立つ
ゞと。紙とはまゝねこのじやないうそれじやこういうく
は指ゞ。まんさう平大根じやア誰でも合点いまゝやゞねゞ。
こうやゞうしうこのゞといふと。むうしく業ゞあつこけこ
おゞうまゝ罪人ゞ用ゝ仕業と入て死骸ゝこれ結こ
なうゝ時その者の小指の先試非人ゞ切て見こ入ひこ

うふ爲と思えて起請こそへてぎるのじゃくげふ者ハこれ
こい爲ふも知れ。さてもく深切な女房じゃと思の花柳ふも
わるさるゆえなこい用ゑこそしてあるうどさこそ長へ入く
首こかけるとハなんぞ者ハ絶程じゃなぐりませぬう。
若い者ハ出やうふ屠城もうぬやうな用ふ出さるませ
扨そのゆえハ扨の立よう。行ても花魁ハ面倒とかぜくや
らんと。乳化されさ恥ハおもいぞ人連ぞ者衆の家屋へ
ゆきさ二階へ通つく給ふの起抵ハ。ゆ爲指と括りつけ。
向ふの鴨居ハ進ト一抱の法半ハ見るやうにずつと並
べて法ふ。も扇がもいてあるとつくくそ法て居

ると扇がて花扇ハ走つくくとそこへ出く来てこれハく
皆さん法抱でよふこそ出半。いひまけをバ。へくくる
大きふ新して。や今日ハよう来さのじやるハ見るふ来さの
じゃ。あの向ふの鴨居とんよふふもく。おきくとあのれハ
化し者ハさ畜生わこうやあのやうふ小おびうあ者ふ。
ふあの言葉じゃふ。やと結うけきしれバ。も扇ハ遠の金蔓
ゆへ。ふ。紙ふもある奴と見へて。まざと新と美者ふ。も
こくくさうつおいて居きましたが。やりくくと新とあ伏酒と
流してていひまんハ。扨ハりくおもぐうふ。その法腹のたつハ
ぜ之理。このえハわが身のうへの有様と。若さ四へ滝の

いかに一ぺん懺悔いたしませぬ。所望されて下さりませ。元
とうが釈里。壹間の小百姓家内八人よりあつた田地と
こちらそこぐ壹反と送るところ。祖父さまの長の足つ
らい祖母さまの眼ぐ見えずそうでまた爺さんもそう〳〵年寄
ねはまの病野山のかせぐもあるまい。婆ばかりさんが
女ばかりでそれハくたくたかせぐ。ハ多し。積金ハ
かさなるとふも仕ようのないこころ。私ゞ丁ど十才の歳
皆まこやらくこのて。稗一粒もれまれ不足。年貢の
の金ハそはう。上納さるハ田地ゞあげる。さすれハ親子八人
ゞ治はこたゝ孫ハなるね仕合せ。ちの時よりさんゞ。不幾ふ
ゞも八人の命ハかゝらもねと。泪ぐゝふ私どろ家の
内。貧ともしさ。ものすごい時ハ金ばかりて。買てくまるさゞ。山方の
親ゞくさすれハ今の釈ゞくさハ釈子ハ為ハ命ハ釈ハ
ある主人ハ一人も多勢お者城ゞろ。主人〳〵食の設ゞる
やう。帝と上ゞ小者ゞ今ハ主人〳〵日ゞ小者ゞそれ四〳〵
私ゞ夫実ハ切ゞ。ゞこの左ハ子の小指。ゞ洗ハ通ハ
さ一ぱそのほうハ小ゞ賀指ちの人実とやまりまハ。
只今ゞ子ゞあるハたつさ人〳〵ゞ四ゞ。ゞ
江戸中人ゞ。おゞ指の数ハ伸指ゞ知れもせぬ
さゝ〳〵ハやゞ小年中ゞと者〳〵ハ米の西のおそ

ろしく嫌ちがのといはれまいぞそこが若男さまのかな
ーさどうぞ不役とおぼしめし法話聞かされてたさう
きせと。泥ぐるぐるひとりいまたが出ちーナァといひ
ながら。泥とかろくとぶーぷどもの人ならんで
法さつてい雑度とさてやられねばあの女房の記録
のうちつたつ二枚ちくしが美寅ようもひぐこれ
ぜ小指とけやうよ切て上さもおぐうまそれその法方の
胴欲ちまこと法とろ法とろ体おぐへがありそる
この外の法方もおぐやうふうさびあいかされうこ。
ちやうだうが然めしとうとけ平伏ちみ

人はもう笑い法しでそうやむじやと一同ようんーーー
小ぶいまいい実よあまよいいつぞやあまが知いぐこやもあ
る又おくも仕て長さ法ちんもぶ今あまがせい実の知と
いいおまがちいらぐいいないとで人がぶへ人もぶ四へ
鴨形ようつと記録と指と。紙ーれちぐへ出あやうぞつ
ようて情いれ皆さ反法さ紀へたいたやうちとおさひ
くよ扇屋城立生二三町かーる風俗でみめいくよぶひ
まいいいでもおまよ遠ひいるいぐはまーが小場ていれ扇ぐ
人中ぶもを情なくおりさでまあろどちようと意ーぶぐ
いてしい遠へとうてうーーう。ぶ人てなよ扇屋乃おぐ生

合さとやにいわうだぐうまをすぐれたいろくお猩くも
あるえんじゃもむりふい祇すぐ高貴四へぴうまを玉鞭い
ちつくもたいぐ。おのもくぐ已惚うちたまうのこんで命と
ゆるくえのうへ（此猩く遠も赤み代時うちそのまうもかー
こいつ人間持ていおくの方右さうん眼いに取ふとい上ても。
天窓ぢおくくんはとおくくう耳いに行おにといっても。
鼻とおくくう頬とおくくんもるやうふ澱磨ぢいも
秋のたいおもうーふものであって。城ふれみれ伝ふまる
色意色光色国色我であつさ者ま遠ひいみまい夫
とおふたくていふくんると。下度方周の器ふまるぐふと

いて隠止ふつまるみも角もない水のやうるこうのなれど。
君と後で雲水ゆるとりとふふ法事安ようけいのるよ
やうふたひをやうふ。情利根うちのまなつて。ずとうふの器
まは仕くちまうくまるーこうやは昔は味というう宿泊
沛ちふまれていい法ーねぞ（ぴ猩くれ援の中へうく立伝て
考（て見ると。此やーふ精智恵の一人了皆ずうる事が
業ものもあるうのじゃを沈授ハ今寝て私が皆孫ーいひ
まうんこ扱紅ぢかのるいどふでいぢうまを。ぢうまをふのといひます。ぢ
と云ふて長の性とーぴ業好の人ハ業のるうとおりふて

無代出し〜遊好ハ遊と呂ひ。淫留理ずさ、淫留理ずさ
呂ふ申うおらうで皆わいくの腹の中ゑ化あご乱出る
のじやそのゑいゑ様ゑ淫乱のなるゑのじやるいそこで人ハ
ゑご我ゑんしと知つてこれと無ふくゑ無〜祝ばるゑ
ねゑでちさうまず。先年武人ゑ者雷語と通うあり
まし〜ゑ途中ゑ狐のゑご乱でありまゑ。あれハゑふ
しさのゑ〜〜呂〜問おうしゑられハあまハ町ゑ大ゑ来て歯
ごろしまたといふそんゑ天〜い実わて狐ゑ法いく。
こんくゑろ。ふいくゑろ吠でわろふめとやなべい。
やねゑろ。ふんくいふでいふ申ふさゑハ法ざうませね。と

いふさげゑ。あの流遊ハ腹の中ゑもれゑくのゑさゑうゑこの人
ゑ法ハ狐ゑ法いくこの狸ゑつくこのとゑふさゑも申ませねゑ
死灵の生灵のとゑうゑ〜たのもんませねそれゑゑうの方ゑ
の霊ゑる人間ハゑ〜つくおまゑうくの迷ひんゑゑ狐ゑ法
ゑをゑう狸ゑ法ゑれゑう酒ゑ法ゑれゑう色ゑつゑまゑう
金銀ゑ法ゑれゑう諸道具ゑ法ゑまゑう女中方ハ衣装ゑ
法ゑれゑう櫛笄ゑ法ゑれゑうして昏〜いゑう嫌いふ
て種ゑゑ申ゑくゑ宗ゑとなゑ仏ゑと亂の毒ゑゑのじやなゑハ
ゑゑふるゑ人ハ出ゑんゑ知て人の方ゑとゑゑく無〜祝ばるゑ
ゑゑゑやゑと知ゑバ方ゑの異じやゑ方ゑと知ゑねバ方ゑの

糞槽よりあの汚穢といふものも大と流してあるとどんな
風らども悪く調法なものじやがきかうの大の消さう炭
ばかりの事に至り私方なる風呂に悪い人ろ炭あるとうも
仕ようのないものじやの事に至りなく炭始末に勢若せて
て至りいたらぬやうなものじやさるふよりく此心学とい
ふわやのじやうのくするとどんな悪しい化をあがおよよ
もえらねあるとこと主殺親殺夫殺の大罪もこれと無
あるとまあく無一さう事に皆腹の中うち起出るのじやそ
きようついて或小悪怖ともあるとうもあるの迷あるの国の
立ちこと小百姓の嫁が姑と殺しさうもしさらもも

たしかうらくこのやうなおそろしい嫁でいたさうませねう
もしわ嫁入して来る時こい姑へまを法いて私ハ行ふもそ
んどまりせぬ不調法ものさで不始末るまでうでるさま
りませふたくねれいとよなるといつて涙して可愛つ
てやうませと我身をうさげ順の居をちつて居さ者を
ひいわるまいうそこで姑も又身を立へつていやのふと
もいはもう小某ハよる悪病ばかりなる若い嫁の疲害がう
どふぞ面倒ばんてやされたのこまりすしいふふにちづいな
あるまうひうあるもやさんといふ文字よりうらづ減
ようあ来て居るこいふものじやそこで流さるるハ流しい

妻でこふ姑丈を舅いろろふ言んうらっかあ来て夫婦へ
あてこしゆきいやといふてと。嫁も又流しの妻でさいく
あうがてこいぞんじまんにまてこ言で若へいとのあなさ
きをへいを老年。どこふぞを冷おさこれけふ用いおされ
でたさうませといふそこで又流やを自もお紙いふてく作
さるのふたうおおへ義うでも用ふなるがよいそへいぞまぞ
知こうねかうふさろしやきやこいること。嫁も又ちいく
あうがてこふぞんじますそ初の孤いれたがいた伯の中
お。おまろしくの鬼がおこねゆへ睦じのこれがあ流れ財
して。新像なしこいふ活佛のあ寄合じやおりやらの線味

たうりしやないそへ夫婦の中でもちのこうろ。どんふ我慢
ち夫婦でも。暫れの盃代抓わてするあでもるいちの
時ハれたがいまこで。夫ハ女房ろ愛のたつこ一つ也へ。
女房も又夫たるの此一人不知これも明治合新の人といふ
家が繁ようお来て居る。山中うおと自然像うち犬や猫
がうそ居こなく。ねとおりふでであろ。扨もく人間がこと
いふこのハ苦しいをのじやあれうろ又まバおきホが中うお
畜生ハ沸るしいをのじやおのとうよ知ね同士一ッお一
寄合とれたがいと盃代むいこう飛ついうふうくほん
くの懇合するが人る方ハあの中うよ知ね同士が寄合

てもたらひに礼儀がこしらへてあるとて夫婦のさうづきなさるれば
夫婦の礼のあり。嫁姑のさうづきなされ、夫婦の
礼儀のあるを感心するもちろんいはるまじ。そんなるを嫁
姑も姑婦のあんといふ文字を取てだく
猫と笑つまねをしてゐる日のたつを待ふて
居るやうなるこしらひ。なるほどつらひも苦
なれども互にいたんでいふやうもたらいまくと
もらやうになるさふなるとは世人といふ字ら秋花彼岸
とうとうこゝろもして姑い嫁と嫁ふもたらも楽りを楽しこと
やはい嫁といふやうになり。嫁も又たらさるを楽して居
宜しいがいしやいなといふやうなそこで仏喧しいと
誰よいのうと結めるとそうやおかへの呼やうあんまり
しやうとこ。互に角と出るとけるとどんどいふこゝろが結
嘩よなれども仕ようふとあはいはるも知れぬ網法をのと
いふく嫁ぐ。姑も段ばなりおりてさらも笑顔いかに人
並まんざら慶悦ら拾ひあげらまてこのでもるい
仏の慈仏の慈悲といふ聴とこゝさ親里もあるこのおかへの使
ゝも。なりまはまはいとこ姑も又こしあはこしいこふ
歳いる眼いらすしといふこゝさのが頃ゝ逢まこゝろりど
て。おれはまうど眼も結見へるぶ見も逢老おめへまんざら

そるゝに為せ起しと仕て男子中も法さうれ中きく
おそろしの嫁の面つきゝんるも嫌しやさかの人といふ字の
長い方の陽点の姑がみちらく法点の嫁の後へ行すぎると。
陰点の嫁も又順の乃と。うーるふて。陽点の姑の天窓の
上へあるゆうふるさふるとは人といふ字が逆さゐと
ひつくりうくるるとゝ。どうつゝ感ん仕あつさ大猫もんてい
られるやあく〳〵えどめいきるひんであつさがちや逆さ
にひつくりくつゝきんくの嵩合がどしやつさりくのふ
あれらが仲百人ちてことといてあろがとまわ法ますいよ
どやないらこれと見上げトとしてだんと逆さして歩行

中ふるその内芸事ハなの若よやそこでかの百姓の嫁い
ひ弟子彩見ふなる姑いだんく悪病よなつて。紅ろう晩
まで。がみ〳〵噛合おつさが。後よいとふく姑ハ眼が。ぢぶ
まで。それ内ハ事ゝ疑んがぶろうて。嫁が悪て仕ゆでも
仕て居ると。又貴様仕あるのかの人が悪もせゐゝ今維中ろ
来さじやなふろのそれ兼釜の下が燃るの拵が。見れさで
おろふのとへざる世話と中くやへつひ嫁も愛おつろして。
ゑゝこちろ波ゝさゐも。純かげんゝ無ればようぶ命も経が
わると思へ中ふる。是が真実ふろ老年ハ注眼ハ見
へず。嗜法不自由ゝ。おろふろと。何中でん城つく

して順の理と約束ぬうちハなしぬるまで清ざりませぬ。眼の
見へぬとさいふ病ひに。無礼な振舞するといふが。即ち天地を
ひつくりかへした様なものじやもの。道徳は狭の裁る処じやけ
まどこれを奈ふるといふも無ござるものに。使ひ方変ず裁り
ましたらそれハどふなれバ。ある夏の頃昨日ハ田植とあるると
いふその日の晩に嫁が麦を搗ましてそれを裏の庭へひ
ろげそとへ出して干て置く家内ハ皆田植に出ました。
それで今の眼の見へぬ姑さんが只た一人留守番として
居られるところへ俄に夕立が。来て来ましたもの。姑さんハ其
麦を濡してハと思ふから。かたい体をがらさぐりく庭へ

這出てかの麦の干てある筵の縁をさがしく探りながらて
内庭へ引出ふくと仕まいましたと是ハかるいに眼ハ見へず
筵の縁の麦がおほし溢ましたさ。それとも知らず姑さん婆ハ
引出ふくいど骨を折て居るところへ嫁ハ又干て置いた麦が
気にかかるから田からおがって来て見れバ。姑が麦を通りに
仕て居らるる。そこで此嫁がも寛容な者でくおまへさん
能ぞお気をつけて下さりましたさうに。私が今まいらうなら
まあくしの筵をよらりませぬハなくねど。しうじやお。
平生天地が。ひっくりかへって迷さんに成て居るものへ嫁ハかへ
って眼找たて。先そのざる盲の指あざしものから。それまく

向ふの縁の麦ぐだへなり溢きさどやなへ。まあそつちへ引込でたまされといひさる脇でせ姑と揚へ実働しまうもせど麦と内へかへぐ。扨浸よ先てゐれば姑ハそこふたれれてゐるゆへ例へ麦でおこしてゐんまべ用とまらして居る。それハ嫁のつまんで実さ脇が姑の飯へあくいく。それが未明のよ向とろつさのどやのとおいまろるゆどやないろ。それろ近所ぐ溢出して。亭主と田うろ畑で来るやう医者とむうへるやうあの業のと大騒しても仕ハなり。何の義ゆもたゝぬるどやこれと過ていはれませねぞへ。なぜおれば。一朝一夕之故ゝ非で。平常の毒れ不孝が

溜しよ積りくて此通りまたんろく来さのどや何とおそろしいことのどやないろそこでまあ近所でも是ハ大切のゆゆ。まづ急病で死まつとつふしてゆふ南ろハ海であつさけれど。誰いふとなくおきハ嫁が実ろだ！！て殺しさのどやばもの金神平生ろう嫁のおろうづるくつさのとあちこちでもひそくちこちいふ。是ぐ人のいふのでいないぞへ。元来天理と曲てある古へ天ふロなへくとのつて言しひるのどやそ上げひそくもぐかつて純実へるとのどやたろろ変でいふるハ。ぐ虚氣して居るぐ小さな変で呼ぐるハ人が耳とたて、

行をいふと言葉つけるを若じやんよ居ようとい
はうとするのは蚊の間の呼云ハ天の
ごとくの電のごとくといふて天ぐち嫌ひおさるくらゝじや扨
又法よりもかやうなるのハまあなりさけぬるりでは
なるけもとど昭く孫おがこうなつて後よハ。あんなの
してもはかまひるい清よもんくいをのじやもどくたた
でもいふやうなりどふも持ておられぬうそのくら
入年月ハ石捕れ法吟味よりまいさところだけ遠の
実ころでしで殺しくさ沢ど伝ハ状よおよびまりさ西ぺの
法後しで二日肆のうち居村で孫よかアまりさ

安ハ家ハ三十ハとうやうまでもさ又亭主もかく
しておいさ科ようつて狀門ハ鼻りまりさ。ともも歳ハ十
三とうりるのハとおそろしいものじやなんらいおそろ
い狭ハ。元来まあ行ふうあることなつとハ不審うつてハ
らくしませ行ふも保証ハ行ふうあるこうじやなく実
不義之家よハ必除狭ありで平生その者の股の中ハ
おれうくのんうちたくうこ造地狀じやさるにつ
でハ人ハ心学もおしへよハ出て本来我のハを知ハ一
年ハ日ハおてがくよ凝かさはつさ怨い氷と打くと
さ。行ハもおくぬえの赤子ハ清いんよ立派ア。主人ハ

孔子親たゞ其六子の一人正孔順の子どもゝ孫ハなくてゝ
ゝてはざりまいそこで爰ふ孔子孫ゝ孟順といふなら
とれ志めいたなさるのでれはざりまいたのまうもふなん
ゝ申すゆへまづ今日ハ元張ゝ上ゝまうします

心學道話二篇畢

国立公文書館
National Archives of Japan